

# 発話/記述における de dicto/de re の区別に見る 文と談話のパラレリズム

## How (metalinguistic) negation interacts with *de dicto/de re* interpretations in sentences and in discourse

山森 良枝  
Yoshie Yamamori

同志社大学  
Doshisha University,  
yy080707@gmail.com

### 概要

本稿では、モーダルな背景を持つ発話文が談話とその参加者の共有知識の構築にどのように関わるのか、という問題を（メタ言語）否定を通して検討する。メタ言語否定は命題の真理条件ではなくその前提となる世界を否定する。ここでは、肯否疑問文の応答文における（メタ言語）否定へのアクセスが質問対象命題の帰属可能な世界が単一か否かという論理特性に依存することを手掛かりに、文と談話/共有知識の相互作用の実態の一端を示す。

キーワード：言表様相 (de dicto)  
事象様相 (de se)  
メタ言語否定  
(metalinguistic negation)  
モダリティ (modality)

### 1. はじめに

共通基盤 (common ground) は、対話/会話参加者が当然のこととして疑問を挟む余地のない (例えば) 現実世界に関するような我々の共通知識を指し (Stalnaker 1974, 1978)、協調的コミュニケーションの重要な背景として捉えられてきた。しかし、共通基盤の中身はブラックボックス化されており、特に対話参加者の心的態度が関わる発話の場合、どのように対話参加者間の共通基盤の異同が認知され、組織化されるのか、その実態は明らかではない。一方、意味研究では、報告や蓋然性判断の対象となる命題の帰属を、可能世界という擬似的な世界への定位の問題として議論することで、単一の世界に定位される *de re* (事象様相) と、複数の可能世界のうち best な (と attitude holder が判断する) 世界に定位される *de dicto* (言表様相) という2つの種類を区別する。ロマンス語では *de re* は直接法、*de dicto* は接続法で表示され、述語の形式に応じて判断主体の思考や信念の再構成が可能になる。しかし、こ

のように再構成された思考や信念が、対話/会話の構成や共通基盤の組織化とどう関わるのかを具体化することは難しく、明示的には三者の連関性はないことになる。それを調べるには、命題内容ではなく、情報の帰属先を直接問題にする言語現象を見つける必要がある。メタ言語否定という (命題の真理条件ではなく、その前提となる背景や世界の適否を否定の対象とする) 言語現象を通すことで、判断主体の思考を表す命題情報の対話者間での受け渡し、あるいはその抑制と共に、それに伴う背景となる世界や共通基盤の変化の有無を具体的に調べることができる。

協調的コミュニケーションでは、発話命題が帰属する背景や共通基盤を常にアップデートする必要がある。本稿は、肯否疑問文の応答文に現れる (メタ言語) 否定をケーススタディとして、これまで明示的に捉えることのできなかつた、(モーダルな背景を持つ発話や文の) 命題内容及び attitude holder の思考と談話の構成・共通基盤のアップデートとの連関を追求することで、協調的コミュニケーションの背後にある共通基盤を常にアップデートする仕組みの解明に向けた課題の一つを明らかにすることを目的とする。

### 2. モダリティと疑問・否定のスコープ

#### 2.1 現象

動詞の屈折に関わる直接法や接続法、仮定法などのモードが文法範疇に属する一方、義務や命題の真偽・蓋然性判断を表すモダリティは意味範疇に分類される。日本語では、「だろう、らしい、ようだ、かもしれない、なければならない、か」などの文末形式や聞き手に対する話者の態度を表す「の、よ、ね」などの終助詞によってモダリティが表示され、[[命題 P]らしい]よ]]の

階層構造を形成することが知られている(益岡,1991)。この構造に従えば、否定辞「ない」は[[遊びに行く]ない]た]らしいのように命題内の述語に付加される<sup>1</sup>ので、否定辞より高位置にある「らしい」に「ない」を付加した「\*遊びに行ったらしくない」は非文法的な文になる。だが、否定辞が述語に付加されていけば問題なく使用できるわけではない。(1a)(2a)は同じ形式の肯定疑問文だが、(1b)の否定応答文が問題なく容認されるのに対し、(2b)は(2a)への回答としては不自然になる。(＃は不自然な文であることを示す。)

- (1) a. X氏は{来たか/病気なのか}  
 b. いや、{来なかった/病気じゃない}
- (2) a. (今現在マイナンバーカードを所持していないと言った人に)  
 マイナンバーカードは家に置いてあるんですか  
 b. #いや、家に置いてないんです  
 c. いや、そもそも持ってないんです  
 d. いや、家に置いてあるのではないんです

(2b)が不自然であるのに対して、(1b)や「の(です/だ)」を付加した(2d)が不自然ではないのはなぜなのだろう。

## 2.2 益岡(1991)

益岡(1991)は、「ない」のスコープが直前の述語に限られる(3)と述語を超えてスコープが拡張される(4)との違いについて、前者が「泣いている」という事態が存在するか否かを問題にするのに対し、後者は事態の存在を前提にその事態の叙述の仕方を問題にする点にある、とする。同じことは(5)と(6)の質問文についても成立する。(3)(5)と(4)(6)の違いは「の(だ/です)」を持つか持たないかにあるので、「の(だ/です)」が叙述様式判断型の読みに関係している、と益岡は主張する。

- (3) 選手達は[泣いてい]ない  
 (4) 選手達は[悲しくて泣いている]のではない  
 → 悔しくて泣いているのだ  
 (5) 選手達は[泣いてい]ますか  
 (6) 選手達は[悲しくて泣いている]のですか

しかし、この主張が適用できない例もある。次の例では、「の(だ/です)」を持たない(7)にも、持つ(8)にも叙述様式判断型の読みが生じる。

- (7) 君は [ (今日) 車で来ました]か  
 (8) 君は [ (今日) 車で来たのです]か  
 (9) [ (今日) 車で来ませ]んでした

益岡はその理由を、(7)には「歩いて/自転車で/バスで来た」という対比想定の中で「車で来た」が適切な叙述であることを示すことができるからだ、と説明する。

ここで先程の(2)の例を考えよう。前のセクションで述べたように、「の(です/だ)」を持たない(2b)は不自然だが「の(です/だ)」を付加した(2d)は不自然ではない。益岡の主張は、(2b)には対比想定が現れないが、(2d)には「の(だ/です)」の付加により対比想定が現れることを予測する、というものである<sup>2</sup>。

しかし、益岡は、(1)で示したような、(1b)で問題なく使用可能な述語否定が(2b)では不自然になる理由を説明できない。谷口(2024)は対比想定だけでは説明できない例として、コンピュータ否定文の容認性の違いをあげている。そこで、次のセクションでは、その具体例を見ることにしよう。

## 2.3 問題のありか

益岡は、「の(だ/です)」や対比想定があれば、否定のスコープが直前の述語を超えて広がるというものであった。しかし、このアプローチは、(1b)と(2b)のように同様のパターンを持つが適切性が異なる述語否定の場合を、うまく説明できないように思われる。次の谷口(2024)の例を見てみると、その問題がはっきり見えてくる。まず、(10)Aと(11)Bについて考えよう。どちらも同じコンピュータ否定文が使用されている。しかし、(10)Aは問題なく容認されるが、(11)Bは不自然になる。

- (10) (市役所で、家族構成に関するアンケートを、職員が、Aに代わって記入している)  
 職員: えーっと、次の質問項目ですが、弟さんは今、社会人ですか?  
 A: いえ、社会人じゃないです  
 (11) A: 久しく会ってないですが、弟さんは、もう社会人ですか?  
 B: #いえ、社会人じゃないです  
 (いえ、まだ学生です)

(以上、谷口(2024))

<sup>1</sup> 久野(1983:p. 140)は否定辞「ない」と疑問詞「か」のスコープを「通常、その直前の動詞、形容詞、「Xダ/デスに限られる」とする。

<sup>2</sup> ただし、実際には、(2d)で「職場に/貸金庫に」という「家」以外の候補が想定されているわけではない。この点については後で触れる。

もし(10)Aに対比想定が現れるなら、益岡説はその容認可能性を正しく予測していることになる。しかし、谷口(2024)が指摘する通り、(10)Aでは「社会人か学生か」の対比想定が現れない。それにも拘らず、(10)Aは容認される。つまり、(10)Aにも(11)Bにも「の」がなくても叙述様式判断型の解釈の誘因になる「社会人か学生か」の対比想定が現れる可能性は十分にあるのに、対比想定は生じない。それでも、(10)Aは容認され、(11)Bは不自然になる。このように、益岡説は、コンピュータ否定文固有の現象を説明できないので、別の説明原理を探さなくてはならない。

以上から、解明すべき問題を指摘することができる。

- (叙述様式判断型否定及びその成立条件の対比想定とは別に) 応答文にコンピュータ否定文の分布を制限する要因は何か?

これに対する本稿の回答は以下のとおりである。

- 応答文においてコンピュータ否定文の分布を制限する要因は、質問対象命題の帰属可能な世界が単一か否か(de dictoかde reか)という論理特性に求められる。

§3ではde dicto・de reの違いが応答文におけるコンピュータ否定文の分布をどのように予測するかを考察しよう。

### 3. De dicto vs. de re

肯否疑問文応答文へのコンピュータ否定文の分布制限の要因を解明するためには、叙述様式の適否を問題にする対比想定では不十分で、別の説明原理が必要である。

まず、検討すべき現象を繰り返す。問題となる例はすべて肯否疑問文の応答文でコンピュータ否定文の形式を持っている(cf.(10)A,(11)B)。しかし、同じ文脈で使用されているのではない。(10)では、質問者である職員に「弟は社会人」であることへの思い入れはない。一方、(11)の質問者Aには「弟は社会人」への個人的なコミットメントが見て取れる。しかし、このような文脈においてはコンピュータ否定文を使用することはできない。反対に、「の(です)」を導入することは、次の通り、(11)'Bでは問題なくできるが、(10)'Aではできなくなる。これは、コンピュータ否定文の分布に質問者の質問命題へのコミットメントが関係していることを示している。

(10)'職員: えーっと、次の質問項目ですが、弟さんは今、社会人ですか?

A: #いえ、社会人じゃないんです

(11)'A: 久しく会ってないですが、弟さんは、もう社会人ですか?

B: いえ、社会人じゃないんです

それでは、コンピュータ否定文(と「の」の挿入)が認可されるのに必要な肯否疑問文のニュアンスはどこから生じるのか、それは、質問者の質問命題へのコミットメントが反映されたものだと考えられる。しかし、コミットメントと言うだけでは、肯否疑問文の応答文におけるコンピュータ否定文の分布条件を明確な形で捉えられないように思われる。そこで、ここでは、質問命題が真偽未確定命題であることの意味を追求すると、肯否疑問文が信念文に見られる(believeの補文に埋め込まれた)命題のde dictoとde reの2通りの解釈を持ち得ることを示す。

まず、Quine(1956)の例を見てみよう。(12)の信念文は、(13)と(14)の2通りに解釈できる。Quineによると、FBIが関心を持つのは、(13)ではなく(14)が真である場合である。

(12) Ralph believes that Orcutt is a spy.

(13) Ralph believes that there is a spy called Orcutt.

(14) Orcutt is such that Ralph believes that s/he is a spy.

(13)と(14)の違いは、存在量化詞のスキープの違いとして捉えられる。(13)の意味は、(13')のように表示される。ここでは、存在量化詞がbelieveのスキープ内に生起する狭いスキープを持つ。

(13)'Ralph believes:  $\exists x(x: \text{Orcutt})(x \text{ is a spy})$  (de dicto) 一方、(14)の意味は、(14')のように表示される。ここでは、存在量化詞が広いスキープを持ち、believeを超えて、そのスキープ内に生起する変項を束縛する。

(14)'  $\exists x(x: \text{Orcutt})$  (Ralph believes that x is a spy) (de re) (13)/(13')はde dicto(言表様相)、(14)/(14')はde re(事象様相)と呼ばれる様相を表している。ここでは、de dicto(言表様相)の場合、補文命題の真偽は未確定である一方、de re(事象様相)の場合、(15)(16)のどちらも真になる可能性がある、ということがポイントになる。

(15) Ralph believes that Orcutt is a spy. 真

(16) Ralph believes that Orcutt is not a spy. 真

その理由を簡単に述べると次のようになる。(14')の通り、de reでは、Orcuttがbelieveより広いスキープを取る。このことが意味することは、Ralphが(14')の“Ralph believes that x is a spy”に関わる証言をした際、Ralph自身がOrcuttという記述を実際に使ったかどうかはわからない、ということである。Ralphは証言ではa someoneと言ったのだが、(12)の発話者がその人物が

Orcutt であることを知っていて、元の発話を言い換えたかもしれない、といったことである。従って、*de re* (事象様相) の場合、補文命題の帰属可能な世界は単一ではない。

では次に、前のセクションで触れた肯否疑問文の応答文におけるコピュラ否定文の分布に着目して、(a)質問対象命題の帰属可能な世界が単一か否か、(b)それは質問者の信念世界か否か、(c) (a)(b)の分布条件としての適用可能性、について吟味し、(c)については可能性が高いことを示そう。

(a) / (b) コミットメントを *attitude holder* の信念世界への帰属、という形で捉え直すと、次のように言うことができる。まず、肯否疑問文の質問対象命題 *P* が質問者の信念に帰属する、つまり、狭いスコープを取る場合、コピュラ否定文は不自然になる。反対に、*P* が質問者の信念世界に帰属しない、つまり、広いスコープを取る場合、コピュラ否定文は容認される。*De dicto* では存在量化詞が *believe* より狭いスコープを取り、*de re* では広いスコープを取るという特徴がある。これを肯否疑問文に適用すると次のようになる。

(12) *P* が *de dicto* であるとき、コピュラ否定文は認可されない。

(13) *P* が *de re* であるとき、コピュラ否定文は認可される。

(12)は (12)'、(13)は (13)'のように言い換えられる。(12)' *P* の帰属可能な世界が単一であれば認可されない(13)' *P* の帰属可能な世界が単一でなければ認可される(c) (12) (13)が先程の例を説明できるかどうか見てみよう。まず、通常の肯否疑問文の(1)では、コピュラ否定文が問題なく使用できる。(1a)と(1b)は、真理値が異なるだけで、そこに帰属先が問題になるモーダルな背景はない。一方、(2a)は質問者の想像であるから、質問者の信念世界に帰属する/*de dicto* と見なすことができる。ここでは、コピュラ否定文(2b)は認可されない。また、(10)の質問命題とその否定命題は真理値が異なるだけで、そこに帰属先が問題になるモーダルな背景はない。一方、(11)Aは、Aの信念世界に帰属する/*de dicto* と見なすことができる。コピュラ否定文(11)Bは認可されない。以上、(12) (13)により個々の例を説明できることを見た。質問命題の帰属に関する論理特性が、肯否疑問文の応答文におけるコピュラ否定文の分布条件である可能性が高いと考えられる。

#### 4. メタ言語否定と談話文脈/共通基盤

前のセクションでは、他者の信念世界に帰属する情報を表すコピュラ文を否定することができないことを示した。それでは、この否定不可能性は何処から生じるのだろうか。それは、日本語ではモダリティ形式が統語的に否定辞より高い位置にあり、否定辞を付加できないという制約(「\*家にいなければならない」)を反映しているようにも思われる。(2c)や(11)Bの「まだ学生です」、(2d) (11)' Bの「質問命題+の」は否定的発話ではないが、他者の信念を直接否定できない場合の次善の策として、質問命題の適切さや前提となる信念世界をアップデートし改変するものだと考えられる。このような否定的言説の特徴は、命題の真理条件ではなく、その前提となる背景や世界の適否を否定の対象とするメタ言語否定に通底する。このようなメタ言語否定が、思考の対話者間での受け渡しや抑制と共に、談話の背景となる世界や共通基盤の調整機能を持つという本稿の結論は、今まで明示的に捉えられなかった文の論理構造と談話文脈/共通基盤の相互作用を確認する重要な結果と見なせるものかもしれない。

#### 5. おわりに

文の論理構造と談話文脈/共通基盤(*common ground*)とが関係するのかもしれないのは、今まで明らかではなかった。本稿では、その関係を探るための有力なアプローチとして、メタ言語否定を通して、両者の相互作用の一端を明らかにした。

#### 謝辞

本研究は科学研究費基盤研究 C (課題番号 20K00557)による支援を受けている。

#### 参考文献

- [1] 益岡 隆 (1991) 『モダリティの文法』東京;くろしお出版。
- [2] Stalnaker, R.C. (1974) "Pragmatic presuppositions", M. Munitz and P. Under (eds.) *Semantics and Philosophy*. New York: New York University Press: 197-213.
- [3] Stalnaker, R.C. (1998) "On the representation of context" *Journal of Logic, Language and Information* 7(1): 3-19.
- [4] 谷口洋志 (2024) 「日本語コピュラ文の出現環境とその動機について」京都大学修士論文。
- [5] Quine, W.V.O (1956) "Quantifiers and propositional attitudes", *The Journal of Philosophy* 53(3): 177-187.